

食事場面での直接訓練について

認知の障害で食事停止する場合の対応：①～⑤

□①スプーンを手渡す方法：適切な一口量をすくい、患者にスプーンを手渡します。まっすぐ口に入るような持たせ方にします。



□②スプーンを持ったまま手を介助する方法：柄の長いスプーンを使えば、介助者は柄の先端を持って口に入れる介助をすることができます。2本のスプーンを使って、口の中の食事を飲みこんでから、次のスプーンを渡すようにするとペースを守れます。



□③ハッピーターンを用いる方法：飲み込みの問題が比較的軽度な場合が適応です。1かけら唇で取り込ませることで、嚥下反射が誘発されます。

□④咬反射（かむ反射）により口が開きにくい場合：スプーンでK-pointを軽く刺激します。開口が促され、刺激を外すとかむ運動に続いて嚥下（反射が誘発されます）。

□⑤唇を閉じない場合：下あごの固定と唇をとじることを介助します。唇に触れたとき吸啜（吸う）反射が起こる場合は利用します。食べ物を口腔内に入れたときに上唇を刺激し、吸啜反射で口唇閉鎖されるタイミングで、スプーンを抜きます。



□かむことや食べものの塊をつくる際の障害の場合：介助者が、スプーンでゼリーを2～3mmの薄いスライスを切りとり、「そのまま丸呑みして下さい。」と指示します。

□咽頭へ舌の送り込み障害の場合：介助者が、まず、舌背の上に水平に入れます。口を閉じた舌の奥の持ち上がりを感じます。その後上に向かってスプーンを抜きます。



□嚥下（飲み込み）反射ができない場合：タイミングがずれる場合には、スプーンで舌の奥に食べ物を置いたらK-pointを刺激して素早くスプーンを引き抜き、嚥下反射を誘発してください。

□リクライニング位で自力摂取するときの工夫：テーブルを傾斜させ、滑り止めマットをお盆の上下に敷きます。柄の長いスプーンを使うと食器に届きやすいです。自力摂取のときゼリーをサイの目に切っておくと一口量が多くなりません。

